



水 稲 管 理 情 報

令和元年7月
J A 志 賀
能登南部営農推進協議会

中生穂肥編

穂肥を適切な時期に施用して収量を確保！！

1 生育概況と当面の管理

- ・現在のコシヒカリの生育は、平年より3日程度早い状況となっています。
- ・弱小分けつの発生を防ぐため、幼穂形成期(7月10日頃)まで中干しを継続し、稲体の健全化を図りましょう。
- ・今後は、①出穂までの1か月間の飽水管理、②適切な穂肥の施用、③出穂以降の水管理、④出穂後の2回防除の徹底に努めて下さい。

【参考 生育調査結果(7月8日現在)】

品 種	草 丈 (cm)			㎡当たり茎数(本/㎡)			株当たり茎数(本/株)			葉 齢 (枚)		
	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%	本年	前年%	平年%
コシヒカリ	68.6	97	102	506	106	105	28.7	108	118	11.7	100	102
ゆめみづほ	64.1	97	102	513	97	97	29.2	108	102	12.3	100	102
ひやくまん穀	64.1	90	97	478	97	104	26.5	98	107	11.0	96	102

2 中干し終了後～出穂期までの水管理 **【ポイント①出穂まで1か月間の飽水管理】**

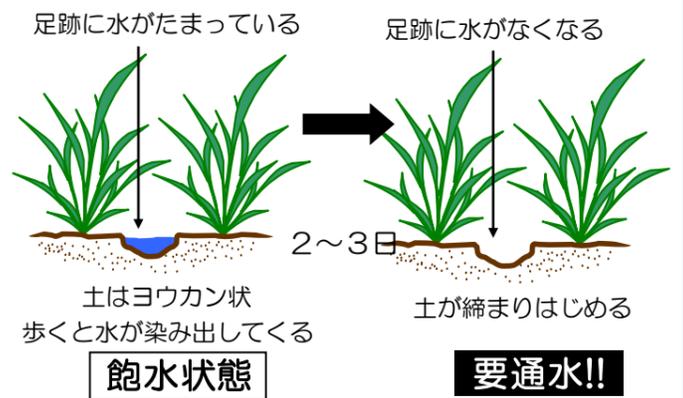
- ・登熟期間の水稻の活力を維持するためには根を健全に保つことが重要です。
- ・根の活力維持には、適期中干しに加え、中干し以降の水管理が大きく影響します。
- ・きめ細やかな水管理により登熟を向上させ、未熟粒の発生を防ぎましょう。

飽水管理の徹底

幼穂形成期(早生6月30日頃、中生7月10日頃)以降は新しい根の発生が少なくなるため、中干し終了後は2～3日間隔を目安に通水し、飽水状態(右図)を保ち、根の活力維持を図りましょう。

- 1 通水は出来るだけ朝方か夕方に行いましょう(水田内の温度を上げない)。
- 2 集落や地域ぐるみで、計画的な水利用に努めましょう。

【飽水管理】とは・・・ほ場表面に水はないが、足を踏み入れると水が染み出てくるような水分状態を維持する水管理のことです。



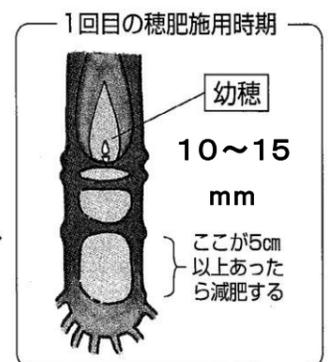
飽水状態

要通水!!

3 出穂予測と穂肥時期の目安 **【ポイント②適切な穂肥の施用】**

- ・本年のコシヒカリの出穂期は7月30日頃になると見込まれますが、田植え時期・ほ場条件・気象条件等により、出穂期は前後するので、穂肥は必ず幼穂長(10～15mm)を確認して施用して下さい。
- ・葉色が濃く茎数が過剰で草姿の乱れている(葉身の垂れている)ほ場では、1回目の穂肥時期を2～3日遅らせ、施肥量を2割ほど減じて施用し、2回目の穂肥は必ず施用しましょう(重要)。
- ・志賀米、能登米コシヒカリの場合は、化学窒素成分量を3割削減させるため、基肥にBB 高度056号を上限の28kg/10a 施用した場合、BB 有機入り能登穂肥一発 または、BB 能登みのり(2回合計)の施用量の上限は30kg/10a 以内として下さい。
- ・基肥一発肥料を施用したほ場では、原則、穂肥を施用しないで下さい。

カッターで茎のまん中を切る



追肥(穂肥)時期と施用量の目安

品 種 名	出穂予測日	施肥体系	肥 料 名	穂 肥 時 期 (出穂前日数)	葉 色	施 肥 量 (10a 当り)	
志 賀 米 能 登 米 コシヒカリ	7月30日頃	一発体系	BB 有機入り 能登穂肥一発	7月11日頃(-19日) 幼穂長: 10~15mm	3.75	25~30kg	
		分施肥体系	BB 能登みのり	1回目	7月11日頃(-19日) 幼穂長: 10~15mm	3.75	10~15kg
				2回目	7月17日頃(-13日)		10~15kg

4 出穂期～収穫期までの水管理

【ポイント③出穂以降の水管理【乾かさない】【ずっと溜めない】【すぐ落とさない】】

- ・出穂期以降は、籾への養分集積(転流)を促進させるため、
刈取り直前まで1か月以上は飽水管理を継続しましょう。
- ・**通水は出来るだけ朝方か夕方に行いましょう。**
- ・夏期の湛水状態は、水田内の水温が上昇し、根の機能を低下させるので3日以上は湛水はしないで下さい。
- ・集落や地域ぐるみで、計画的な水利用に努めましょう。
- ・**刈取り直前まで出来る限り飽水状態を保ちましょう。**

◆「長期湛水」→根腐れにより根の活力が低下
◆「干ばつ」→表層根を傷め、登熟に重要な下葉の枯れ上がりにつながる

↓

稲体の早期栄養凋落や倒伏につながり、
登熟不良や登熟ムラの要因になります！

【参考1】玄米の長さや幅はいつ決まる??

- ・玄米は開花後、約5日で長さ、約14日で幅、約20日で厚さが決まります(図1)。
- ・この期間の登熟状態がそれぞれの発達に影響を与えることとなりますが、
特に「厚さ」については、最も遅く成熟期近くまで影響を受けます。
- ・このことから、**品質・収量の安定を図るため、刈取り直前まで水管理を徹底し、登熟向上に努めることが玄米の発達からみても重要です。**

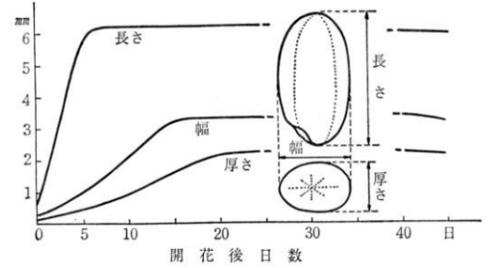


図1 玄米の外形の発達

【参考2】出穂後の水管理が品質に及ぼす影響

- ・**高温年においては、5日間隔の间断通水を行う慣行管理に比べて、夜間通水により乳白粒や胴割粒の発生が抑えられます。**
- ・**夜間通水を行えない場合でも、通水間隔を短くして常に飽水状態を維持すると、慣行管理に比べて品質低下を抑えることが出来ます(図2)。**

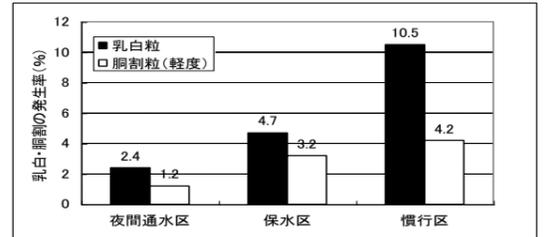


図2 出穂後の水管理が品質に及ぼす影響

5 斑点米の発生防止対策 【ポイント④出穂後の2回防除の徹底】

- ・7月1日に中能登地区で実施した雑草地でのカメムシ類調査では、**カメムシ捕獲頭数が過去最高となり、本年は斑点米の増加が懸念されます。**(「緊急 能登やさしい米づくり情報」参照)
- ・このため、基幹防除では、**出穂期の7日後(穂揃期)と14日後(傾穂期)の2回防除が斑点米の被害防止に重要な**ので必ず実施しましょう。

(1)基幹防除

①粉剤体系

粉剤防除では防除効果を高めるため、風の無い時間帯を見計らい、散布後3～4時間は降雨がない日に散布して下さい。

回	病虫害名	薬剤名	化学合成農薬成分数	散布量(10a)	散布時期		摘要
					早生	中生	
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	トレバリダビーム粉剤 DL	2成分	4kg	7月16～18日	7月26日～29日	出穂直前
2回目	いもち病、カメムシ類	ラブサイドキラップ粉剤 DL	2成分	4kg	7月25日～28日	8月4日～7日	出穂7日後頃(穂揃期)
3回目	カメムシ類	キラップ粉剤 DL	1成分	4kg	8月1日～4日	8月11日～14日	出穂14日後頃(傾穂期)

②粒剤体系

粒剤防除は一人で散布できることや、粉剤のような飛散(ドリフト)が少ないため、市街地等でも散布が可能なメリットがあります。

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	イモチエースキラップ粒剤	3kg	7月18日～20日	出穂10～12日前頃(散布後4～5日の湛水)
2回目	カメムシ類	キラップ粒剤	3kg	8月2日～6日	出穂3～7日後頃(穂揃期)(散布後4～5日の湛水)

③液剤体系

	病虫害名	薬剤名	散布量(10a)	散布時期	摘要	
1回目	いもち病、紋枯病、カメムシ類	ビームエイトトレボンゾル + バリダシン液剤5	2成分 0成分	650倍・1000倍・100L	7月26日～29日	出穂直前防除
2回目	カメムシ類	キラップフロアブル	1成分	1000～2000倍 100L	8月4日～7日	出穂7日後頃(穂揃期)

(2)随時防除の実施

病虫害名	薬剤名	散布量(10a当り)	摘要
稲こうじ病 墨黒穂病	Zボルドー粉剤 DL	0成分 3～4kg	【予防剤】常発地では出穂10～14日前に散布(出穂10日前以降は薬害の恐れがあるので散布しない)
紋枯病 稲こうじ病 墨黒穂病	モンガリット粒剤	1成分 3～4kg	【予防剤】常発地では出穂14～21日前に散布(散布後4～5日の湛水)

【農薬の適正な使用について】ラベルに記述してある使用方法以外の使い方をすると法律(農業取締法)で罰せられます。消費者に安心して安全な能登のお米を食べていただく気持ちをもって、農薬は正しく使用して下さい。